

「自信をもっていること」

中学校 3年 中村 恋絆



「自信を持っていること」は悪いことでしょうか。皆さんはどう思いますか。
私は昔から、自分に自信をもって生きてきました。たくさん前に立って自分を魅せて、どんなことにも「自分ならできる」と歩んできました。そんな私が小学生の頃は、みんなから「明るい子」と捉えられており、友達をたくさんもつ人気な女の子でした。しかし、その捉え方は、思春期が近づくとつれて変わっていきました。

中学校に入学すると、私の「自信」の捉えられ方は、「明るい」から「ナルシスト」に変わっていきました。そして、中学一年生の後期から、私の生活はがらりと変わりました。元々は仲の良かった友人から陰口を言われるようになりました。かつての親友からは「自信がありすぎてうざい」と言われました。しかし、当時の私はあまり気にしていませんでした。

そんな私が周りの目を気にし始めたのは、中学二年生に上がった頃でした。私はヘアアレンジが大好きで、その日はツインテールをして学校に行きました。すると周りの席の人たちから、「かわいいと思ってる?」「ごめんけど似合っていないよ笑」と嘲笑されてしまいました。私はこの時初めて、自分が間違っているんだと思いました。

そして同じ年の夏休み明け、私は自由研究で「歌」を提出しました。このころの私はまだ、これが苦しみの始まりになるなんて予想もしていなかったことでしょう。

作品鑑賞会で、みんなは私の歌に大注目でした。「上手!」「歌えるんだ!」という声もありましたが、私の耳に多く入ってきたのは「イタイ」の一言でした。その瞬間から私は本当の、心からの「自信」を失いました。今まで大切にしてきた「自信」、「自分はこれでいいんだ」と思ってきたものを失った気がしました。

今、日本人は世界で一番自信がない人と言われています。実際、ダヴの調査では、自分に自信がないと答えた日本人は、全人口の「93%」で世界最多というデータもあります。このような状況にある原因は、主に二つあると思います。

一つ目は「インターネットやスマートフォンの普及」、二つ目は「なんとなくの理解」だと思います。

みなさん、「アンチコメント」というものを知っていますか?その投稿者や、人物、グループに対する悪質なコメントのことです。アンチコメントは、インターネットの普及により、年々増加傾向にあります。その中にある「ブス」「なんか太くね?」などの人の見た目に関するコメントはその人を傷つけ、自信を失わせるものばかりです。画面越しに書かれた言葉でも、それを受け取る側にとっては直接言われた言葉と変わりません。日常的に溢れ、目にするこれらの言葉たちが私たちの「自信」を削っていく。そんな気がするのです。私が言われた言葉もそれに近いものがありました。

自信がある人に対して言われる言葉、「ナルシスト」「自意識過剰」。そもそもこの言葉、しっかり理解しているでしょうか?ナルシストとは、自己中心的で批判に弱い人、自意識過剰とは、自分への評価を気にしてしまう人という意味です。ですがネット上や学校では「自信満々な人」という意味で使われているのではないのでしょうか。そう、なんとなくの理解なんです。本来の意味を知らないまま使われる言葉は、人を傷つけることもあります。「自信を持っている」というだけで「ナルシスト」と決めつけられてしまうことで、その人のよさや、努力まで否定してしまうことだってあります。そもそも「自信」を持つことを否定すること自体、私は間違っていると思います。

今、SNSという世界を与えられ、自由に発言する場が与えられたことにより、生きにくくなってしまった私たちは、これからどうすべきだと思いますか?私は言葉の繊細さを理解して生きるべきだと思います。言葉は、相手を喜ばせることができますが、少しでも間違えると相手を傷つける原因になってしまいます。さっき紹介した二つの原因も、言葉の繊細さを理解していれば、人を傷つけることなく、私たちの生活を豊かにしてくれます。そして、言葉の繊細さを理解することは、私たちでもすぐに実践できます。今、大人だけではなく、私たちもネットを使い、言葉を学び、話します。そんな現代だからこそ、言葉の繊細さを理解して生きることが必要不可欠だと思います。

私は思います。「自信を持つことは悪いことじゃない」と。前向きで、とても美しいことなのだと。

※原文表記のまま掲載しています。

「あなたのように」

中学校 3年 渡邊 透

青少年の主張
Opinions of Teenager
発表作文



悪口って、ダメやね。その言葉を母からよく聞いています。悪口によっていじめに発展したり、不登校になったりしてしまう人がいること、私は知っています。小さなことでも言葉は相手の心にキズをつくり、残ります。そんなことを知っているにも関わらず、私は「イヤだな」「ムカつく」と思ったことは友達と共有してしまいます。悪口がいけないことと知っているのに悪口を言ってしまう。私はその原因を考えてみました。「自分の思いに共感してくれる人がほしい。」これが理由の一つなのではないかと私は思います。実際に、「ほんとそう。前からイヤだったんだよね。」と共感してくれる友達が私の周りにはいます。その言葉を聞くとなんだか心がスッキリするのもしかしです。そんなふうに、安心感を求めてつい、悪口を言ってしまうのです。そこから「でさでさ…」と、気づけばその話題はどんどん広がり、「そういえばこの前…」と別の出来事まで持ち出されるようになっていました。

私の母は悪口や陰口がキライです。そんな母の前では、絶対に悪口を共有できませんでした。しかしある日、「聞いてほしいんやけどさ、」と母に話しかけられました。私はてっきり何か相談したいことがあるのかと思っていました。「仕事先の人が全然対応してくれへんくてさ…。」母が言う言葉には、あまりトゲが無かったけれど、いわゆる「悪口」でした。私はその時、あの悪口がキライな母にも思いをぶつけたくなる時があるのだなと人間らしさを実感できてうれしかった記憶があります。話を聞き終わった後、母は突然、こう言いました。「でも、悪口ってダメやね。」悪口を自分の子どもに話してしまったから。そんな理由ではありません。この一瞬、人として「悪」になった自分を取り戻すために言い聞かせたのではないかと考えました。その母を見て、自分が話した内容にどれほどの影響力があり、人を悲しませるか、私は考えたことが無かったと気がつきました。

私は悪口を言っている自分が楽しくて、満足できれば良かったのです。私は母に、「悪口キライなのに、なんで今言ったの？」と問いました。「悪い風に言っちゃったけど、こうやって話しておけば、透へのアドバイスになるかと思って。こんなこと話してごめんね。」母のする悪口は、私のする悪口の目的と全く違っていました。嫌なことをされたのは母であって、嫌な気持ちになったのも母です。しかし、母は視点を変えて、「透に伝えておこう。」にしてくれていました。母から悪口を聞いたのはこれがはじめてです。私は、これまで、なんども友達と悪口を共有してきました。母の思いを知って、罪悪感で胸がはちきれそうでした。これまで自分が何気なく口にしてきた言葉の一つ一つを思い出しました。あの時、一緒に笑っていたけれど、本当は傷ついていた人がいたのではないかと。自分が言った一言で誰かが悲しい思いをしていたのではないかと。そう考えたら、学校で友達と笑いながら悪口を話す私。母には一生言いたくない。いや、言えません。今日、学校どうだった？」と毎日聞いてくれる母に申し訳なかったです。悪口や陰口を話すことを心から「悪」だと考えている母のようになりたい。そう思いました。「悪口はダメなこと」そんな簡単な考えが私はできていませんでした。でも、母はできています。大人だから？それが理由ではありません。心から人の思いを大切に、胸に生きてきたからだと私は思います。私が言った悪口。どれだけの人を傷つけてきたのか、悲ませてきたのか。もう一度深く反省します。そして心にきざみ生きていきます。私も母のように、これからは「イヤだな」「ムカつく」と思ったとき、すぐに誰かに話すのではなく、一度立ち止まり、本当にその言葉が必要なのか、人を傷つけてしまわないかを判断したいと思います。また、人の思いを大切にできて、皆から愛されるような、あなたのようになります。皆さんも、心に思っていること、一度深く考えてみてください。

※原文表記のまま掲載しています。